

アンナ・フロイト—その生涯と業績

山 崎 篤

On Anna Freud—Her life and Contributions to Psychoanalysis

Atsushi Yamasaki

(2011年11月25日受理)

【はじめに】

精神分析学、もしくは精神分析的な心理療法と聞いて、「アレルギー反応」を示す人は多い。その大きな理由の一つには、創始者であるジグムント・フロイトが、「幼児性欲」に着目し、それを理論上の、そして治療上の中核に据えたことがあげられるだろう。しかも彼が理論構築を行っていきにあたっては、成人の患者たちから語られた幼児期の記憶に基づいて再構成を行うという、「科学的心理学」を標榜する人々たちにとっては、「非科学的」とみられる方法で行ったのである。

精神分析がジグムント・フロイトによって世に問われて、100有余年が経つ。その間に精神分析学は、治療対象の拡大やそのことによって起こる技法の修正、そしてそこで得られる新たな知見を積み重ねてきた。ジグムント・フロイトが提唱したいくつかのことには基礎を置きつつも、いくつかの展開を迎え、現在に至っている。この経過についてまとめてみせることは、筆者の手にあまるのでここでは立ち入らないにしても、1916年から1917年にかけて行われた「精神分析入門」という講義でジグムント・フロイトが語ったことから、大きな発展があったことは確実なことである。

中でもジグムント・フロイトの末娘で、唯一精神分析に携わることとなったアンナ・フロイトは、ジグムント・フロイト自身は「自由連想ができない」という理由で精神分析の対象とはしなかった幼児を含む子どもたちに対する精神分析的な心理療法を、児童分析として確立し、多くの子どもたちの心理療法に携わることとなった。また、その経過で子どもたちに対する「科学的な観察」に関心をもって実施した。そこから得られた知見は、当時の発達心理学者たちにとって刺激的なものであったし、やがては現

在の発達心理学にも大きな影響を与えるまでのものとなった。彼女は、精神分析学、ひいては臨床心理学の発展に大きな貢献をした人である。

しかし、アンナ・フロイトは控えめな女性で、自分からは表立った場所に立つことも注目されることも好まなかったらしい。評伝としては、Young-Buehl(1988)、Claudine and Pierre Geissmann(1992)、Rose Edgcombe(2000)などがあるが、彼女は、父ジグムント・フロイトおよび家族、そして自分について書かれたものに触れるたびに、心を痛めていたとのことである。彼女が児童分析に関する講義などで精神分析のサークル内に初めて登場するのは1920年代のウイーンであるが、彼女が非医師であったためもあって、イギリスでもアメリカでも評価されなかったらしい。1950年代半ばまでは、イギリス、アメリカでは非常にマイナーな存在であったとのことである(藤山, 2010)。

そのような人であったために、精神分析、ひいては臨床心理学が発展していった過程でアンナ・フロイトが担い、果たしてきた役割は見逃されがちである。今この現代において彼女のなした仕事を振り返ってみるならば、臨床心理学に対して、以下の3点に関してその貢献に特筆すべきものがある。そこでその3点に絞って、本稿を進めてみたい。その3点とは、以下の通りである。

(1) 精神分析的発達心理学に基づく児童分析を開発したこと。現代風に評価するとするならば、これは分析というよりも教育的な介入に近いものではある。

(2) 後にアメリカの精神分析学の主流となる自我心理学の礎をハルトマンとともに築いたこと。歴史的にみると、アメリカに亡命したハインツ・ハルトマンの手によって、自我心理学は一般心理学に接近していった。

(3) ハムステッドでの乳幼児の直接観察を通して、発達ラインを明らかにしたこと。これはマラー (Mahler, M. S. et al, 1975) や、ボウルビー (Bowlby, 1969等) の研究、さらにクライン派の観点をも取り込んで、子どもの発達を全体的な観点から、評価しようとする意図、すなわち発達上の正常と異常とを診断する目的をもっていた。また発達心理学という領域において、父ジグムント・フロイトが「性欲論3篇」(1905)において、成人の分析から再構成した発達論を、実証的な側面から補完し、さらに発展させたものともいえるかもしれない。

[生い立ち—ジグムント・フロイトから、分析を受けたころまで]

アンナは1895年、開業医をしていたころのジグムント・フロイトの6番目の末子として、ウィーンに生まれた。ジグムントが39歳の時の子どもである。この時期ジグムント・フロイトは、まさにフリースとの間での自己分析の渦中にあり、アンナの誕生は二人の両親にとって、精神的にも経済的にも期待されたものではなかったようである。特にジグムントにとっては、心臓病の徴候が見られていた時期でもあり、手放して喜べるような心的状況ではなかった。アンナ自身も自分の出生について、両親が8年間の間に6人の子どもを設けていることを受けて、「避妊をしなかったから、生まれたようなもの」と述べている。

聡明ではあったが、病弱な子どもであった。母親よりもむしろ叔母のミーナに可愛がられたらしい。子ども時代は、母親の一番のお気に入りには2女のソフィーで、父親のお気に入りには長女のマチルダだった。姉たちとの父親をめぐる葛藤そして母親をめぐる葛藤が、後のクラインとのライバル心むき出しの論争の起源となったのかもしれない。

アンナが長ずるにあたって、当時精神分析は医師が行うものと考えていたジグムントは、彼女を医師、精神分析家にしようとは思っていなかったらしい。アンナは当時の一般的な進学コースのギナジウムではなく、自由学校のような学校に入れられた。学校の成績は良かったが、アンナは学校が大嫌いであった。暗記を強いたり、一方的な形での授業にはなじめなかったらしい。物語を作ったり、本を読んだりすることが好きな子どもであったようだ。語学にも関心をもっており、英語、フランス語、イタリア語を学んだ。そのこともあって、彼女はジグムント・フロイトのもとを訪れる海外からの患者たちとおしゃべりをするを好んでいた。とはいえ、ジ

グムント・フロイトはあくまでもアンナを普通の結婚をさせたかったらしい。それが何故、後に、自分の子どもたちの中で唯一そのアンナの分析をジグムント・フロイトが行い、国際学会で自分の原稿の代読をさせたり、さらにはIPA (International Psychoanalytical Association) の秘書として重用するに至ったのであろうか。

ちょうどアンナが18歳の時あたり、56歳だったジグムント・フロイトは、ソフィーが結婚して家を出たり (のちに死亡)、「トーテムとタブー」(1913)で父親殺しを論じたり、それと軌を一にするかのように、フェレンチやユング、アドラーたちとの仲たがいが表面化ようになっていた。ジグムント・フロイトは公的にも私的にも孤独な状況にあり、最後に残ったアンナを手放したくなかったとも考えられる。いずれにせよ、アンナも父親が大好きであったし、一度ベニスに二人きりで旅行したことがとても幸せな出来事だったと回想もしている。姉たちは、普通に結婚した。兄たちは、第一次世界大戦前後のヨーロッパ大陸での空気の中で、社会主義運動やユダヤ民族主義活動に身を投じていた。アンナは美人だったらしく、ジグムント・フロイトを取り巻くサークルの若者たちからの求婚も受けたが、ことごとくそれを退けた。女性分析家のザロメとは大変に仲が良く、レズビアンではないかとの憶測もあるが、本人はそれを否定している。1982年に没するまで、生涯独身を通した。

いずれにせよ、この時期にアンナは、ジグムント・フロイトから都合5年にわたる週5日の分析を2度に分けて受けている。ジグムントが友人に語ったところによると、この分析は「成功した」ものだったらしい。しかし、この時点では誰も、アンナが精神分析運動において、中心的な存在になろうとは誰も思っていなかった。アンナは17歳で小学校の先生の資格を取り、教師としてのキャリアを積んでいた。これは彼女が体調を崩して職を辞することになるまで5年間続いた。父親からの分析を受けたのはこの時期と重なるが、ソフィーが死んだ1919年には、いわゆる「指輪」を父から受け取っている。

[児童分析の開発]

アンナ・フロイトのキャリアの始まりは教師であった。1914年に教師の資格を取り、子どもたちの教育に携わるところから、彼女の仕事は始まったのである。1920年にアンナ・フロイトは健康上の理由で教職を離れ、静養の後に「児童分析」を行う

ようになった。その成果を踏まえて、1926年にウイーンで「児童の精神分析技法入門」という講義を行った（これは1927年にドイツで出版された）が、その時点での講義の内容を検討する限り、相当に教育的な性質をもったものであった感は否めない。ウイーンでのこの講義は、当地では熱狂的に支持されたものの、既にメラニー・クラインが大きな影響力をもっていたイギリスでは批判の対象となり（アンナ・フロイトの講義では、たびたびクラインが引き合いに出され、彼女自身もメラニー・クラインをかなり意識していたことが分かる）、アメリカではアンナ・フロイトが医師ではなかったという理由で相手にもされなかった。

第一次世界大戦が終わり、多くの孤児たちが遺された。アンナ・フロイトは、彼らのためのアメリカ教育基金にボランティアとして携わった。また、1922年に「叩かれる幻想と白昼夢」という発表を行った彼女は、ウイーンの世界精神分析のサークルに次第に深く関わるようになっていた。そこで知り合ったアウグスト・アイヒホルン（非行少年の領域に精神分析を適用したことで知られる）から、ウイーンの福祉局に紹介され、教育と福祉のためのインステチュートの仕事に携わった。ここでは、彼女自らも実践を行いながら、インステチュートの研修生、教師、教育者、社会福祉活動家たちに講義と訓練をおこなった。「精神分析的な教育」、「精神分析的な教授法」といった内容だったとされるが、父ジグムント・フロイトの性欲論に基づき、将来神経症にならないような保育・教育の在り方を実践するものだった。教育という面に関しては、潜在期の意義を特に強調していることが注目される。また子どもの発達を、親が邪魔しないこと、適切な環境を用意することが、おおかた性欲論に基づいて話された。

さて、アンナ・フロイトは父との分析が終わった1923年ごろから、子どもの精神分析的治療に取り組むようになり、1925年にはウイーンの世界精神分析サークルで、子どもの精神分析に関するセミナーを主催するようになった。1924年にはザルツブルグのカンファレンスで、メラニー・クラインが「早期分析」の技法についての論文を発表しているので、二人の確執はそのあたりからだと思われられる。

ウイーンで1926年に行われた「児童の精神分析技法入門」では、4つの講義がなされた。アンナ・フロイト派の児童分析の技法は、所謂イギリスでのクラインとの大論争を経て、クライン派の見解も取り込み、さらにはアンナ自身と共同研究者（サンドラーやタイソン）の臨床実践が深まる中で現代に実践されている技法が確立されていった経緯

がある。この現代において、アンナ・フロイト派のセラピストが実際に行っているものは、「児童分析の技法—アンナ・フロイトのケース・セミナー」（Sandler,etal, 1980）に詳しい。ここではアンナ・フロイトが、オリジナルには児童分析をどのように捉えていたかを知るといふ歴史的な観点から、この4つの講義について紹介することにする。

第一講義は、児童分析の準備期間に関するものである。アンナ・フロイトは、子どもが自分から分析を求めてくるものでもないし、例えばお友達のようになって両親の悪口を言うなどすることを通して、まず最初に仲良くなって、固い信頼関係を分析者との間で取り結ぶ必要があると考えていた。遊ぶことはまず、アンナ・フロイトにとっては、仲良くなり、信頼関係を結ぶための手段であった。冒頭からクラインに対する批判がなされているところが面白い。

第二講は、児童分析の方法に関するものである。ここでは子どもの夢や白昼夢、描画の素材を通して分析を行うものとしている。子どもは大人と違って、連想することができないので、これらのものを素材として用いると考えたのである。これらの素材をもとに、無意識の内容を理解し、発達援助的に介入することに主眼が置かれていた。また、発達を促すのにふさわしい遊びを治療者から持ちかける点なども、記されている。これは明らかに教育的な介入である。アナライザンドが自らの心に浮かんだものを、語っていくという自由連想の原則に明らかに反している。イニシヤチブがアナリストにあるのである。モートン・チェシック（Chethik,M.1989）によれば、現代においても、アンナ・フロイト派を自認するプレイセラピストはこういったことをやるらしい。発達のふさわしくないと思える遊びは、止めたりするそうでもある。この点は、子どもの遊びを成人の自由連想と等価なもののみなし、その遊びに寄り添い、そこで示される無意識的空想を解釈していったメラニー・クラインとの立場の違いが鮮明である。

第三講は、児童分析における転移の役割に関するものである。ここでは、良く知られているように、アンナ・フロイトは子どもは実際に両親と生活しているので、成人との分析で言うような転移は生じないと考えた。ただし、治療上は陽性の転移が起こることが望ましいとしていた（これは明らかな矛盾であったが、見過ごされた）。

第四講は、児童分析と子どもの養育に関するものである。内容としては、今日から考えれば、非常に穏当なものである。子どもの発達を中心に、

その発達を妨げることなく、過剰に満たすことなく、いわば程良い養育を説いたものである。乳幼児期の愛情に応えること、思春期の反抗はごく当然なものなので、心配し過ぎることなく、対応することなどが述べられている。アイヒホルンの著書からの症例も引かれ、極端な養育が、後に逸脱した行動をもたらす可能性などにも触れている。アンナ・フロイト自身の症例も豊富に紹介されている。

以上が、4つの講義のアウトラインである。この当時のアンナ・フロイトのやり方を、現代から振り返ってみるならば、「分析、というよりは発達援助的介入であった」とRose Edgumbe (2000) は、述べている。

[自我心理学の礎]

ヒステリーの治療を出発点の一つとして持つ精神分析は、無意識的な欲動や空想を理解していくという発想に方向づけられていた。この「抑圧されたもの」に主眼を置く発想から、「抑圧するもの」という心のシステムに注目する視点が構造論的視点であり、その視点の萌芽は、ジグムント・フロイトの中では比較的早期からあったものと考えられる（例えば、夢の検閲）が、明確に打ち建てられたのは1923年の「自我とエス」においてであったと考えられる。ここにそれまでの欲動心理学と自我心理学との分岐点があるといつてよいであろう。

アンナ・フロイトは、この論文が発表される時期をまたいで、父ジグムント・フロイトから分析を受けていた。当然のことながら、アンナ・フロイトがこの論文を構想していた時期のフロイトの発想に大きく影響されたであろうことは、想像に難くない。彼女が自我と、その防衛機制について「自我と防衛」としてまとめたのは、1936年だった。父ジグムントの80歳の誕生日に送られ、ジグムント・フロイトは大変喜んだそうである。「自我と防衛」(外林大作訳)では、エス、自我、超自我という構造論的観点に立ち、その構造の下に、不安を防衛する自我の防衛活動を分析の対象とすること、そしてその防衛機制の様相が、教科書的にまとめられている。「自我とエス」以来のジグムント・フロイトの考えと、その発展を1つのまとまった形でテキストとしたものであり、ハルトマンに受け継がれていく自我心理学の出発点となる著作であると考えられる。

1936年頃と言えば、イギリスではメラニー・クラインが、「愛、罪、そして償い」(1937)を執筆していた頃である。クラインのこの著作は、抑うつポジションを中心に、早期の無意識的空想と対象関

係について、1つのまとまった形で記述したものである。周知の通り、クラインはその後、妄想一分裂ポジション(1946)、羨望(1957)といったアイデアを発展させ、そのアイデアを土台としてイギリスにおける対象関係論が展開されていくことになる(Segal,H.1989,Hinshelwood,R.D1991)。これらは、人生早期の子どもと母親との間で、愛と憎しみとが交錯する無意識的空想が展開されるというアイデアを中核としたもので、おおざっぱに言えば、子どもの無意識的欲動に焦点をあてた発想であり、欲動心理学としての精神分析の発展的展開としてとらえることができる。

1920年代前半に、いったんあいまみえた二人の児童分析家が、ともにジグムント・フロイトの後継者を自認する中で、およそ10年後のこの1936年頃という辺りで、このように大きく異なる立場に到達したのは何故なのであろうか。ここで私見を述べるならば、この二人の子どもとの最初の出会い方の違いが、かたや自我心理学、かたや対象関係論という基本的コンセプトの違いにまで至ったのではないか。アンナ・フロイトは、子どもに職業的には教師として最初に出会った。一方クラインは、母親として子どもに出会った。教育という営みは、子どもに学ぶべきこととしてその社会が考えていることを教え、社会に適応することを方向づけ、現実と居りあっていく術を身につけさせていくものである。とするならば、アンナ・フロイトが「エスあるところに自我あらしめよ」という意味での自我に着目し、その自我を中心に据えた自我心理学を着想したことも納得がいくように思われる。一方、母親として子どもに向き合ったメラニー・クラインには、自分と子どもとの間で取り交わされる様々な情緒や空想を、身をもって体験していたであろうことが想像される。クラインの基本的アイデアとコンセプトの論理的展開は、彼女の母親体験に起源をもち、方向づけられたものではないかと考えられる。

さて、話をウイーンに戻して、1922年から1936年までの間の当地での精神分析の動向と、アンナ・フロイトの活動に触れる。アンナ・フロイトは、彼女が携わった精神分析運動の核心の一つとして、子どもの観察を行うようになった。すなわち、精神分析治療によってもたらされた(子どもの発達についての)理解を完成させるということ、課題としたのである。彼女は自分が創設した児童のための施設を毎日のように訪れた。施設のスタッフたちは、児童観察者としての彼女の驚くべき資質について注目していたし、またさらにアンナ・フロイトは、児童達のお世話をするスタッフたちの話に、毎日して

非常に注意深く耳を傾けていたものだったという。

長年にわたる児童の精神分析的観察は、次第に心というものの広大な領域をカバーする枠組みを形成していった。このようにして得られた知識は、後にハムステッドクリニックのインデックスに系統的に記録として残されることになった。この行いは、児童の精神分析的心理学が、後に確立されることに対してまた貢献するものとなった。

アンナ・フロイトによると、第一世代の分析家たちが、幼児性欲やエディプス・コンプレックス、去勢不安等の点から、自らの子どもの行動を観察し、記録するようになったのは、1905年にジグムント・フロイトによって「性欲論三篇」が出版されて以降のことだった。彼らはすぐに、自らも分析を受けた多くの子どもの専門家たちと協同するようになった。その専門家たちは、自由に分析的な設定の外で子どもの様子を観察する多くの機会に恵まれていたのである。それから、行動上の障害、例えば逸脱行為をするような多数の子どもたちの観察が行われた。次に関心の対象になったのは、例えば母親との初期の関係のような、子どもの発達のある段階についてだった。その後では、特定の養育上の困難（食事を与えること、親指吸い、分離不安等）に、関心がもたれた。さらには第一次世界大戦によって、子どもたちにとっての外傷的な状況；集中キャンプで生きのびた子どもたち、孤児院に入れられ、そこに適応していった子どもたち等の研究がおこなわれた。

やがて、精神分析的児童心理学を系統的に確立することが求められるようになった。異なる二つのデータ、すなわち成人の分析から再構成されたものと直接観察から得られたものとを統合する必要があったのである。成人の分析から得られた児童期の再構成が中心に据えられつつ、年長の児童の分析から得られた再構成の内容、また幼児たちの分析から得られた知見がそれに付け加えられていった。

アンナ・フロイト（1965）は、精神分析家たちによる児童の直接観察は、いささかのためらいを含みながら行われていたことを強調している。まず、精神分析的リサーチの初期の段階では、直接観察は、非常に否定的なものとみなされていた。というのも彼らパイオニアたちにとっては、彼らの「義務」は、観察された行動と隠された衝動との相似よりも、違いを強調することであったからである。このように、表面上に現れる行動の向こうに無意識的な動機が横たわっているという事実を、確証しなければならなかったのである。この段階では、結局、精神分析的技法そのものが確立されていかねばなら

なかったし、無意識の内容とその表面上の派生物を混同してしまう傾向にあった。しかしながら、このようにかたくなな態度は、少しずつ修正されていった。成人の治療において、分析家が探求するのは無意識的な心ではなく、その派生物であることが認識されたのである。無意識や前意識にある衝動を明らかにするような、言い間違いや不完全で症候的な行為、そして夢の象徴や定型夢に対して関心がもたれるようになった。しかしながら、「乱暴な」分析の罫に陥ってしまわないことは、重要なことであった。

無意識の内容や派生物、すなわち衝動や空想やイメージから、意識からそれらのものを閉め出しておくために自我が採用する方法に、注意が向けられるようになって、分析家には、子どもたちや成人が幾らか分かりやすいものになった。これらの機制は自動的なものであり、それ自身は意識して行われるものではなかったが、その機制によって達成された結果というものは、明らかなものであったし、観察者の視点からは容易に接近できるものだった。

このように、抑圧がもし成功すれば、「表面上には何も見えなくなる」でのあり、アンナ・フロイトが強調しているように、人は子どもの中には貪欲さや攻撃性が見当たらないことに驚かされるのである。一方で、観察者には感じることできやすいような、機制もある。それは反動形成や、過剰な関心、恥ずかしがり、嫌気、同情などで、露出症や台無しにすること、残忍さに対する内的な戦いという代償を払った上でのみその子どもが獲得できるものである。観察者はまた、昇華や投影にも関心を示すであろう。この点においてアンナ・フロイトは、父ジグムント・フロイトの「制止、症状、不安」（1926）の影響を受けていた。さらに彼女は詳細な観察を行うことができたので、もう一つの防衛機制について、その証拠とともに記述することができたのである。それは、攻撃者との同一化である。

それから、自我の防衛機制に関心が向けられた後には、今度は自我そのものが観察の対象となった。自我の心理学は、精神分析的な仕事の中に含まれるものである。自我と超自我に関する限りは意識的な構造物であり、直接的、すなわち表面的な観察を行うことが、その深層を探求することにつけて加えて、適切な探求のやり方である。様々な自我の機能が研究された。すなわち、運動機能や会話の発達、記憶に及ぼす自我のコントロールや、統合機能である。もし一次過程と二次過程の発見が、分析的な仕事によるものであるとするならば、アンナ・フロイトにとっては、前青年期や青年期にある若者や生後

2年目の幼児の分析の枠組み外での観察によって、その二つの過程の違いは容易に見分けがつかなくであった。

ある心の領域においては、分析的な探求ではなく、この直接観察がアンナ・フロイトの方法論にさえなった。というのも、分析には限界があると、彼女は考えたからである。彼女はここで、前言語的な時期の子どものことや、転移が生じてこないようなあらゆる障害のことを想定していた。しかしながら、彼女はすぐにこの点に関して、特に乳幼児に関しては、妥協的なコメントを付加している。例えば、もし様々な形態の分離不安が、子どもが最初に託児所に預けられた時に観察されたとしても、リビドーの発達系列や乳幼児のコンプレックスといった重要な事実は、明らかにその派生物が見え見えの状態であったとしても、分析的な仕事によってかつて再構成されていなかったとしたら、気付かれないままであるだろうというのである。

アンナ・フロイトは1924-5年の初期の仕事に引き続いて、1937-8年にかけて、彼女がウィーンに開設したジャクソン保育所にて、乳幼児に対するこのような精神分析的な観察の仕事を行った。

(*さらにイギリスに移住して後は、戦中にはハムステッド保育所、戦後にはハムステッドクリニックにて、この仕事は引き継がれ、発達ラインの解明、児童期の正常と異常の評価の研究へと結実していった)

ハインツ・ハルトマンとアンナ・フロイトは、ほぼ同時期にウィーンの世界精神分析サークルに入会した。アンナは、彼に対して「兄弟のような」感情を抱いたらしい。アンナ・フロイトが、衝動に対する自我の防衛機制の研究という形で、自我心理学という領域に足を踏み入れたのに対して、ハルトマンは、よりラジカルな形、しかも新しい視点から研究を進めた。それは自我の自律性という観点(1958)である。アンナ・フロイトは、ハルトマンのこの仕事に関心があることをあちこちで強調している。ハルトマンの自我心理学は、この観点を得ることで、より一般心理学に近づいていったものと思われる。

[発達ラインについて]

父ジグムント・フロイトとともに、ナチスを逃れてイギリスにわたったアンナ・フロイトは、ハムステッドに大戦中は保育所、戦後はクリニックを開き、児童の治療並びに観察、児童治療者の訓練を行った(ハムステッドのクリニックは、彼女の没後、アンナ・フロイトセンターと改称された)。彼

女の直接観察という方法論は、前節で述べた通りだが、アンナ・フロイトは個々のケースについて詳細な記録をプロフィールとして記録していった。さらに、マラーやボウルビイ、ウニコット、最終的にはクラインの考えも取り入れ、発達ラインの概念を発表した(1965、「児童期の正常と異常」)。

これはこの時点での精神分析的発達心理学の集大成(さらに、エリクソンのライフサイクル論に引き継がれていくが)とも言えるものであった。彼女は4つの発達ラインを想定し、欲動、自我、超自我のそれぞれの相互作用および環境要因に対するそれらの反応を理解することによって、子どもの発達の全体像を評価しようとした。これは、児童治療を行う上での、いわゆる見立て(発達診断)の発想につながるものであり、臨床的には非常に重要なアイデアであると言わざるを得ない。

さて、アンナ・フロイトが記載した4つの発達ラインとは、まず第一に重要とされるのは、依存的な乳児が段階的に成長し、情緒的にも身体的にも成熟した青年に至るまでのラインである。このラインは、いわゆるリビドー発達を連続的に示すものであり、(1)母子間の生物学的一体期とそれに引き続く分離個体化の各段階の時期、(2)部分対象の時期、(3)対象恒常性が確立される時期、(4)プレ・エディパルな肛門サディズム期(ここでは対象とアンビバレントな関係をもつ)、(5)男根—エディプス期、(6)潜伏期、(7)前思春期、(8)思春期に分けられる。第二のラインは、母親から完全に依存している状態から身体的自立へと向かうラインである。このラインには、(1)摂食行動の発達、(2)排泄行動の発達、(3)自らの身体的ケアを責任をもって行えるまでの発達が含まれる。第三のラインは、自己中心性から脱中心化していくまでの発達である。それには(1)自己中心的な段階、(2)他者が人形のように扱われる段階、(3)他者を遊びの助けとなる相手とみなす段階、(4)他者を仲間として受け入れる段階が含まれる。第四のラインは、リビドー備給の対象が自らの身体から、遊び、そして勉強や仕事へと向かうラインである。それには、(1)自らの身体を使って自己愛的喜びに浸る段階、(2)移行対象が現れる段階、(3)移行対象から離れ、あらゆる柔らかい玩具に固執する段階、(4)玩具遊びの段階、(5)ゲームが楽しめる段階、(6)遊べる能力が仕事をする能力へと変化する段階、が含まれている。

さらにこの発達ラインとその評価のもつ臨床的な含みについて、小此木(1985)は次のようにまとめている。「①発達途上の症状、制止、不安は、必

ずしも以降の発達段階で同じ意味をもつとは限らない。症例によっては、それが永続的に続く病理の最初の兆候でありうるし、別の症例では、一過性のストレス反応である。②児童の障害を診断する場合、年齢にふさわしい状態か、遅れているか、早すぎるか、それはどの点においてか、どの範囲についてか、現存する症状はこれからの成長可能性をどの程度妨げるのか、等を評価することが重要である。③こうした診断評価を行うには、基本的観察（構造論、力動論、経済論、発生論、適応論）の見地にたった発達診断評価表が必要である。④この発達評価表は、初診時の診断面接においてはもちろんのこと、治療過程、終結時、終結後のフォローアップで適用可能であり、治療効果の測定にも用いられる。この発達評価において、発達の停止や発達の葛藤、発達の阻害、発達の停止が見出されたならば、そこに働きかけて、適切な発達が再開するように働きかけるとというのが、アンナ・フロイト派のプレイセラピストの基本的な介入の在り方というわけである。

[終わりに]

以上、簡単ではあるが、アンナ・フロイトの生涯と彼女が精神分析に対して行った貢献を中心に述べた。この貢献は、ジグムント・フロイトが創始した精神分析学の発展の一端を担うものであったろう。

現在、精神分析は100有余年の臨床と探究の蓄積を経て、ジグムント・フロイトが始めたものから大きな発展を遂げている。精神分析、精神分析的な心理療法と聞いて「アレルギー反応」を示す人のあることは、残念なことである。ただし多くの場合、そういった人たちが精神分析として念頭に置いているのは、ジグムント・フロイトがある時点で強調したか、講義を行ったことにのみ限られているようである。人によっては、1905年にジグムント・フロイトが記した「性欲論三編」をそのまま、現代精神分析学がよって立つ発達論として認識し、時として学生たちに講義さえしていることもあるようだ。確かに「性欲論三編」はインパクトのある論文ではあるし、一読の価値はある。ただしそれは歴史的な意味においてである。現代の精神分析学的発達心理学は、もっとエビデンスに根拠をおいた乳幼児心理学に近いところにあること、あるいは軌を一にしていることは記しておきたい。

尚、本稿は福岡精神分析研究会における系統講義で報告したものに加筆修正を行ったものである。

[引用文献等]

- Bowlby, J. (1969): Attachment and loss (黒田実郎ら訳：愛着行動, 岩崎学術出版社, 1991)
- Claudine and Pierre Geissmann: A History of Child Analysis (1992)
- Chethik, M. (1989) : Techniques of Child Therapy (齊藤久美子監訳「子どもの心理療法」, 1999, 創元社)
- Freud, A. (1922): Shlagephantasie und Tagtaum (牧田清志ら訳「叩かれる幻想と白昼夢」, 1981, 岩崎学術出版社)
- Freud, A. (1927) : The Psychoanalytical Treatment of the Children (北見芳雄ら訳「児童分析」, 1961, 誠信書房)
- Freud, A. (1936): The Ego and the Mechanism of Defense (外林大作訳「自我と防衛機制」誠信書房, 1958)
- Freud, A. (1965): Normality and Pathology in Childhood (黒丸正四郎ら訳「児童期の正常と異常」, 1981, 岩崎学術出版社)
- Freud, S (1905): Three Essays on the Theory of Sexuality (懸田克身ら訳「性欲論三篇」, 1969, 人文書院)
- Freud, S (1913): Totem and Taboo (西田越郎訳「トーテムとタブー」, 1969, 人文書院)
- Freud, S (1923): The Ego And Id (小此木啓吾訳「自我とエス」, 1970, 人文書院)
- Freud, S. (1926): Inhibitions, Symptoms and Anxiety (井村恒郎訳「制止, 症状, 不安」, 1970, 人文書院)
- 藤山直樹：集中講義・精神分析（下）フロイト以後（2010）
- Geissmann, C. (1992): A History of Child Psychoanalysis
- Hartmann, H. (1958): Ego Psychology and the Problem of Adaptation (霜田静志ら訳, 「自我の適応」, 1967, 誠信書房)
- Hinshelwood, R. D. (1991): A Dictionary of Kleinian Thought
- Klein, M. (1937): Love, Hate and Reparation (奥村幸夫訳「愛, 罪そして償い」誠信書房, 1983)
- Klein, M. (1946): Notes on some schizoid mechanism (狩野力八郎等訳「分裂機制についての覚書」誠信書房, 1985)
- 小此木ら編：精神分析セミナーV 発達とライフサイクルの観点 (1985)
- Mahler, M. S. et al (1975): The Psychological Birth of the Human Infant (高橋雅士ら訳「乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化」, 黎明書房, 1981)
- Rose Edgcombe: Anna Freud (2000)
- Sandler, S. et al (1980): The Technique of Child Psychoanalysis (作田勉監訳「児童分析の技法—アン

- ナ・フロイトのケースセミナー」星和書店, 1983)
- Segal, H. (1989): Klein
- Young-Bruehl, E. (1988): Anna Freud